

ライシャドウ抜粋版

小劇場公演のための戯曲

盛留 真悟



—



# 目次

第一場	1
第二場	5
登場人物など	8



## 第一場

「ライシャドウ」

1

劇団ミッドスカイが稽古をしている。

がお「はっはっは。悪いな。貴様の芝居なぞ本番中にスマホをつけるだけで台無しになるのだあ！」

たあぼ「クソオ。前説であんなにやめろとお願いしたのに！」

がお「先に明るさを落とすようお願いすべきだったな。うっかりつけても画面が暗ければ深刻なダメージは免れられる」

たあぼ「あまりのまぶしさにその後ろの席の人達は作品に集中できなくなる！」

二人『だーかーらー スマホは音を消して、暗くしてからオフにして！ もう一回言うよ！ 音を消して、暗くしてからオフにして！』

みはる「はいストップ！ どうしよっかなあ。もうちょっと茶番な感じにしてみる？」

たあぼ「待つて待つて。ここらへんでまだ前説の雰囲気引きずってたら、観るぜ！ っていう気合い入りにくくない？」

がお「どうかな。ためしてみないとな」

みはる「一応、意図としてはこのあたりのシーンにいる人物に早めに親しみを持ってもらいたいんだよね」

たあぼ「なんかイメージつかねえな」

がお「あ、君どう思う？」

新人らしき者がいる。

えつこ「えっと時間があるなら全部試した方がいいと思います」

たあぼ「ちげーよ。試した方がいいかどうかの話じゃなくて、茶番方向にしたらどんな感じになるのか、逆にしたらどんな効果があるのか」

えつこ「すみません！」

みはる「若手に当たるなよ。よし、もっかい行こう！」

たあぼ「ごめん一回組み立てるわ」  
がお「俺も」  
みはる「よし、息吐いてくるか」  
がお「吸うんじゃないか？」

正劇団員捌ける。新人残る。

えつこ「怒られたかと思ったー。ここは劇団ミッドスカイの稽古場。地元の先輩方の始めた劇団。この町は東京からは少しだけ離れていて、劇団らしいものはここしかない。私は少し前に観劇をするようになって、あちこちで見かけたかっこいい人達が不思議と同じ町にいるということを知った。なんだか胸の奥の力が出しきれるような気がして、いつのまにか稽古場に潜り込んでいた。演劇の世界に飛び込んだばかりで上手（かみて）も下手（しもて）もわからないけれども、全力の全力が出し切れるように今日も先輩方の技を盗んでいる」

がお「いいなあ、長台詞」

たあぼ「たくさん台詞のあるやつの方がエライみたいに思ってるならまだまだ子供だぜえ」

みはる「あーん？ っていうか、現実の話をしてたなら少し違うんだよな」

えつこ「え？ あ。なんかすみません」

みはる「うちら劇団じゃないよ」

えつこ「一言目から滑った感」

がお「劇団じゃない？ 劇団じゃない？ 劇団じゃない」

たあぼ「なんの活用系だよ」

がお「疑問系、半疑問系、断定系」

みはる「そんな遊びしらねーよ」

たあぼ「なんだっけ？ 劇団か否か」

がお「びみょー」

みはる「いいよ。とりあえずさっきのどこやってからだよ」

2

舞台袖と呼んでいるが、稽古場の隅というイメージ。

十四が稽古を見ているようなそぶりをしている

えつこが十四に気づく

えつこ「君はさ。さっきのどう思う？」

十四「えっ？」

えつこ「え？ 変なこと言った？」

十四「話しかけてくると思わなかった」

えつこ「わりと話をしてると思ってた。」  
十四「はっきり話しかけられたのははじめてかもしれない」  
えつこ「私も実は聞いてるとは思ってなかった」  
十四「なにそれ」  
えつこ「いることには気づいてたし、一応つぶやく感じには話しかけてたよ」  
十四「なにか話してるのかもなとは思ってたけど、きっちり聞こえたのは今がはじめてだよ」  
えつこ「不思議ともっと前から話してる気もする」  
十四「そういうの不条理ってやつだよ。あんまり追求しちゃいけないよ」  
えつこ「そういう演劇もあるんだよ」  
十四「自分は演劇あんまり知らないなあ」  
えつこ「それなのにここにいるんだ」  
十四「ただの勉強中だよ。演劇関係ないよ」  
えつこ「話が噛み合ってるのかどうか怪しいけど、まいっか」  
十四「様子を見てたなら何してるかくらいは分かりそうなもんだけどな」  
えつこ「君はいくつ？」  
十四「え？ とりあえず十四と言っておこう」  
えつこ「年下？ 年下？」  
十四「えっ？ なに、年上なの？」  
えつこ「高校生くらいだと言っておこう」  
十四「じゃあ間違いなく年上だ」  
えつこ「名前は？」  
十四「〇〇だよ（〇〇内は口パク）」  
えつこ「えっ？」  
十四「おぼえにくいと思うけど〇〇だよ。君は？」  
えつこ「えっ？ 〇〇。」  
十四「えっ？ ちゃん？ えっちゃんていい？」  
えつこ「なんだろう肝心なところだけお互いに聞こえてない気がする」  
十四「だよね？」  
えつこ「わかんないからじゅうして呼ぶよ」  
十四「安直」  
えつこ「うちもえっちゃんになってるし」  
十四「えっちゃんじゃないんだ」

3

ミッドスカイが稽古準備をしている。

たあぼ「さて、今日はどっから行こうか」  
みはる「いやいやいや。お前練習しかないのかよ」  
たあぼ「え？ 練習しないの？」

みはる「するけれども！！」  
たあぼ「じゃあなに？」  
えつこ「そろそろ自己紹介などをさせて頂こうかと」  
たあぼ「もう結構馴染んでじゃん」  
みはる「お前が新入りとしか呼ばないから仕切り直してんだよ」  
たあぼ「オレ？」  
みはる「じゃあ、こいつの紹介から」  
たあぼ「お陰様で二周年。本厚木ターボです！ 地元でのあだ名がたあぼうだったので、そのまんまターボです。動く系の小劇場育ちです」  
みはる「よくできました。芸名本厚木ターボ、本名溝口ケンタ。兄弟みんな似たような名前、ケンタのタのところで区別をつけていたのでこの辺じゃター坊って呼ばれてる。見ての通り少年漫画。で、その幼馴染でありながらも、ヒロインではなくライバルとして立ち塞がったのがこの私小田坂美晴。今日いないやつと含めて三人が基本ミッドスカイ。一応ここ私のアトリエだからたまり場兼稽古場にしてる」  
えつこ「みなさん幼馴染なんですか？」  
たあぼ「おま。なんか恥ずかしいなその響き。美晴がヒロインポジションにならなかったのは事実だけれども」  
みはる「それっぽい子はいたんだけど、長くつるまなかったっていう」  
たあぼ「そこは今はいいんじゃないかな」  
みはる「だな。ただの惚気話しか出てこないもんな」  
たあぼ「うっさ（いぼけ）」  
みはる「で、アチシ。アタシ？」  
たあぼ「うっすら自己紹介してたじゃねえか。小田坂美晴、都内の美大生。とりあえずなんでもできる。とりあえずじゃねえなんでもできるな。なんでもできるからなんか演出っぽい位置にいる。芸名なんだっけ」  
みはる「詰め込みすぎ。で、もう一人が世田谷ライトニング。あのイケメン風のやつ」  
たあぼ「かわいそうに」  
みはる「あいつはね。一応立場的にはアイドル風に売られてる2・5次元ミュージカルの俳優。本人はなんかもっと地味なのやりたそう。あいつも昔から一緒にいる」  
たあぼ「形態模写が好きじゃないかな。あと静かな演劇」  
みはる「みんなね。やりたいこととできてるのが若干ずれてるの面白くない？」  
たあぼ「で、その溜まり場になんか紛れ込んだじゃった新入りさん」  
みはる「ほら」  
たあぼ「さーせん」  
みはる「芸名は田中えつこ」  
えつこ「さっき決まりました」  
みはる「本名は今日はいいいね」  
えつこ「はい」  
たあぼ「なんだよ」  
みはる「一個ずつ憶えて欲しいのもあるし、私は衝撃を受けた」

たあぼ「気になるわ」

えつこ「目立つ名前なので、追々で」

みはる「目立つ。そうだね目立つね」

えつこ「かもしもてもわからないふつつかものですが、よろしくお願いします」

たあぼ「かみてしもてからか」

みはる「わかってるけどわからないことになってるっていう冗談だよ」

えつこ「勉強しました」

## 第二場

4

男子が二人放り込まれる。

サトル「うわ。え？ え？」

マコト「すごーい」

サトル「いつのどこらへんだ？」

マコト「オレらと同じ。青少年時代」

サトル「それ人生四分割くらいだよ。大雑把だ」

マコト「なんかほらズレがあるから」

サトル「じゃあとりあえず探るか」

十四「え？」

全員「え？ なんだこれ」

十四「誰????」

サトル「この場合どう名乗ればいい」

マコト「マコト。こっちサトル」

サトル「気さくだな」

十四「ねえ、へんなこと聞くけど、もしかしてうちのお兄さん？」

サトル「お兄さん？ 君はその十四歳くらい」

十四「そうだからえっちゃんからは十四って呼ばれてる」

マコト「十四か。面白い名前だね」

サトル「ていうか。知っている気がする」

全員「思った思った。それ思った」

サトル「口癖一緒かい」

十四「3人は家族か何かなの」

サトル「3人で、マコト。サトル。十四？」

十四「いやいやいや。マコト兄さん？ サトル兄さん？ あとそのひと」

マコト「うわ。見えない」

サトル「何？ 幽霊的なやつ」

十四「兄さんたちも幽霊じゃないの？」

サトル「何を言ってるんだ。」

マコト「そっか幻っぽく感じるんだ」

十四「あ」  
サトル「え」  
十四「にやっとして行っちゃって」  
サトル「誰なんだ。」  
マコト「十四にとっては同じような距離感なんだろうね」  
サトル「そういうことか」  
十四「じゃあなんかわかった気がする。マコト兄さんは漫画描いてる。サトル兄さんは小説書いてる。」  
サトル「よく知ってるな」  
十四「いつも留守番してるから」  
マコト「君か。いつも留守番してたのは」  
十四「そうそう。でもなんか最近、小説も漫画も同じのになってきてるからたまに区別つかない」  
サトル「よし。そうなら話は早い」  
えつこ「え？」  
十四「えっちゃん」  
マコト「えっちゃん」  
サトル「誰？」  
えつこ「何これ。みんな知り合い？」  
十四「知り合いっていうか」  
えつこ「家族？ 誰が誰のご先祖？」  
サトル「やっぱり幽霊っぽく見えるの？」  
えつこ「違うの？」  
十四「あれ？ えっちゃんは違うの？」  
えつこ「私おばけ的に見えるの？」  
マコト「面白いけどみんな落ち着いて。サトルが説明するから」  
サトル「そうだね僕が説明すべきだね。先に答えだけ言うと僕らは同一人物の可能性がある」  
えつこ「私色々やばいなと思ってたけどそこまで大変なことになってたのか」  
サトル「病気とかじゃない」  
みはる「えつこ！ そこじゃない」  
えつこ「あ？ あれ？」

5

舞台袖メンバーが離れると稽古場になっている

みはる「なんかぼーっとしちゃった？」  
えつこ「大丈夫です。病気とかじゃないです」  
みはる「そっかよかった。台本持つとそういう感じになるってことだよな」

がお「7割くらい頭に入っていないと、チラ見でも混乱するよな」  
たあぼ「もったいないんだよこの台本。もっと想像の余地があったんだよ」  
みはる「極端だなあ。出来が良すぎて手が出ないか、手頃なんだけどやりたいことでもないっていう。ちょうどいいのが、なかなか見つからないよね」  
がお「まあ練習用だからな。練習用。今日はあるものでやれるだけやってみよう」  
えつこ「私がぼっとしたばかりにすみません」  
がお「いいよいいよ。プロじゃないんだから」  
たあぼ「お前は本当に女子に甘いよなあ」  
がお「逆にお前は誰にだったら甘いんだ」  
みはる「だからちよいちよい他を置いていくんじゃない！」  
たあぼ「イタタタ。え、オレだけ？」  
みはる「たあぼが痛がるとガオがイタタタって気分になるんだよ」  
たあぼ「何その高度なDV」  
がお「お父さんすみませんでした」  
えつこ「お父さんなんだ」

## 登場人物など

### ライシャドウ抜粋版登場人物

#### 稽古場メンバー

たあぼ 通称たあぼう。芸名本厚木ターポ。兄弟がみんな似た名前で、次男なのに太でおわるからたあぼう。運動神経が良い小劇場役者。ごっこ遊びの天才。

がお 芸名世田谷ライトニング。2・5次元ミュージカルの俳優。歌えて踊れてアクションができる、みたいな立ち位置で働いているが、本人は芸の深いもっと渋い役者になりたい。おままごとの天才。

みはる 小田坂美晴。芸名は超派手だが、えつこの本名とむしろかぶる。新鋭のアーティストで、美術に文壇にとなんでもやる。美大生を名乗っているが実は芸術学系の大学院生。傍では自由業なので地元によく帰ってくる。三人でいる時は演出のポジション。足りない役はぬいぐるみで補う。

えつこ たなかえつこ。本名は雷音寺珠美。家にいづらいのか地元をぶらついているマイルドヤンキー。みはるに憧れているが、たあぼの影響を受けやすい。

#### 舞台袖メンバー

十四 名前が思い出せない少年。えつこ同様に稽古場にもいるようなのだが、同時にいることはないらしい。えつことはおたがいに幽霊的なやつだと思っていた。

ライシャドウ えつこと十四が思い描いていた理想の厨二役者。だんだん具体化してゆき、十四を侵食しているようにみえてくるが。

マコト 絵描き。PN マコト。

サトル 物書き。PN サトル。

執筆できている部分を編集したものです。

完成した台本の正式なタイトルは

小劇場公演のための戯曲「ワインレッド」第二番「雷積童」となります。



---

ライシャドウ抜粋版

---

著 盛留 真悟

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---